

【研究ノート】

鳥取の珊瑚細工

Notes on Coral Work in Tottori City

大嶋 陽一

OOSHIMA Yoichi

要 旨

江戸時代から昭和初年まで、鳥取県内では珊瑚細工が盛んに生産されていた。珊瑚細工の原料となる白珊瑚や黒珊瑚、青珊瑚は、いわゆるアカサング・シロサング・モモイロサングといった温暖な海域で採取される宝石サングの類ではない。その起源は、江戸後期の文政年間（1818～30）に創始された「白珊瑚（はくさんご）細工」にさかのぼり、19世紀前半には毒消し効果を銘打った楊枝や箸として因幡国岩井郡の岩井温泉を中心に、諸国へ販売されていた。

明治期になると、生産拠点が岩井郡から鳥取市へと変わり、白珊瑚や黒珊瑚（海松）等の珊瑚細工を生業とする者が増加した。明治10～30年代にかけて内国勸業博覧会をはじめとする各種の博覧会に出品し、賞を受賞したほか、皇室へ献上されることで内外の名声を獲得する。この過程で江戸時代以来の白珊瑚箸に加え、ステッキや写真掛など近代的な商品開発も進み、さらに鉄道開通も相まって販売額も増大する中で鳥取の珊瑚細工は隆盛を迎える。

しかし、鳥取の珊瑚細工は産業として発展させたいという思惑と、一方で増産を阻む慢性的な原料確保の不安というディレンマを抱えていた。この問題が噴出したのが、大正末から昭和初年であった。大正時代になると細工の原料となる珊瑚を捕獲していたカレイの延縄漁が機船底曳き漁の展開とともに衰退し、珊瑚細工自体も一時下火となる。その後回復の兆しを見せたが、昭和12年（1937）に勃発した日中戦争以降、戦時統制によって再度衰微してしまった。終戦後、かつての隆盛を取り戻すことなく、鳥取の珊瑚細工は歴史の表舞台から姿を消していった。

【キーワード】 珊瑚細工、白珊瑚、カレイ延縄漁、内国勸業博覧会、皇室

はじめに

江戸時代から昭和初年まで、鳥取県内では珊瑚細工が盛んに生産されていた。その創始は江戸時代後期にさかのぼり、現在でも伝統工芸として受け継がれている。この珊瑚細工はとくに明治以降、殖産勸業の重要物品として各種博覧会等へ出品され、皇室等へ献上されていた。

珊瑚細工の原料となる白珊瑚（オオヤナギウミエラ）や黒珊瑚（ツノサンゴ）、青珊瑚（オオキンヤギ）は、いわゆるアカサンゴ・シロサンゴ・モモイロサンゴといった温暖な海域で採取される宝石サンゴの類ではなく、一見するとサンゴとは認識することが難しい。現在では珊瑚細工自体が衰退していることもあり、地元でもその存在を知る者は皆無に等しい。これまで鳥取の近代史や水産史の中で取り上げられることもなく、その歴史についてもほとんど知られていない。鳥取の珊瑚細工自体の研究も極めて少なく⁽¹⁾、近年進展が見られる珊瑚の文化史研究（主に宝石サンゴ）においても取り上げられていないという状況である⁽²⁾。

そこで、本論では江戸時代以降の珊瑚細工の歴史的展開を明らかにし、そのなかで明治期の珊瑚細工をめぐる殖産勸業の動向や珊瑚細工の原料採取と鳥取の漁業との関わりについて検討する。なお、本稿は鳥取の珊瑚細工の歴史について紹介した拙稿を大幅に加筆修正したものである⁽³⁾。

本稿において、「さんご」の使用法として、「サンゴ」は生物的な記述で取りあげる場合、「珊瑚」は加工品や加工材料として取りあげる際にそれぞれ使用したことをお断りしておく。

1. 江戸時代珊瑚細工の歴史

1) 現在の珊瑚細工とその種類

現在、鳥取県内では唯一、鳥取市在住で昭和4年（1929）生まれの岡田省三氏が珊瑚細工を制作している。岡田家は明治時代から代々珊瑚細工職を家業とする家である。同氏が制作する珊瑚細工は、「黒珊瑚細工」と「青珊瑚細工」の2種類である（図1）。黒珊瑚は「海松」とも呼び、青珊瑚は「海桜」という別称で呼ぶ。黒珊瑚細工は一般的には「海松細工」という呼称で全国的に行われていた⁽⁴⁾。山陰地方では、鳥根県江津市を中心に「石見根付」と通称される根付細工の材料として使用されていることがよく知られている⁽⁵⁾。なお、明治～昭和にかけて鳥取地方でも黒珊瑚細工と海松細工が併用されているが、本稿では黒珊瑚細工で統一している。

黒珊瑚は、ツノサンゴのなかまで、珊瑚の体の中心部にある骨軸を用いて細工物を作る（図



図1 現在の珊瑚細工製品

2)。漢名を「石帆」「海松」「磯松」「鉄樹」などと言ったようで、「黒珊瑚」も漢名のひとつであった⁽⁶⁾。青珊瑚はオオキンヤギのなかまで、これも骨軸を原料として利用する（図3）。ともに、水深200メートル以下の深海に生息するサンゴである。

岡田省三氏からの聞き取りにより、現在の黒珊瑚・青珊瑚の原料入手方法について紹介しておく⁽⁷⁾。なお、岡田氏が最後に原材料を購入したのは今から18年程前のことであるという。原料となる珊瑚の購入は、底引きの網に引っかったものを漁師に保管してもらい、細工の材

料がなくなり次第購入した。黒珊瑚は鳥根半島の加賀（松江市鳥根町加賀）や小伊津（鳥根県出雲市小伊津町）といった漁港の漁師から直接購入した。また、青珊瑚は、主に兵庫県北部の香住（兵庫県美方郡香美町）や城崎（兵庫県豊岡市城崎町）、鳥取県内の網代（岩美町網代）や賀露（鳥取市賀露）で購入したという。岡田氏の祖父長太郎・父愛吉氏の時代には鳥根県の隠岐島まで仕入れにいていたが、岡田氏が細工を始めた昭和30年代以降、隠岐での買い付けはないという。珊瑚の価格には相場がないため、漁師との交渉で値段を決めたといい、軽自動車いっばいの珊瑚で平均5、6,000円くらいであった。原料は、購入後、1年以上日陰で自然乾燥させ、骨軸を細工物に使用している。

黒珊瑚・青珊瑚細工として現在制作されているものは、ペンダント、帯留め、ネックレス、タイピン、指輪、ブレスレットである。とくに黒珊瑚でパイプ、茶席用のはし、風鎮、花瓶、置物、菓子楊枝なども制作されている。ただ、岡田氏は高齢であり、製造する細工物の種類は以前より大幅に減っている。

2) 白珊瑚細工の創始

現在は製造されていないが、昭和初年まで鳥取には「白珊瑚細工」という工芸品があった

(図4)。鳥取の珊瑚細工はこの白珊瑚細工から始まり、明治～昭和初年にかけて全国的に名声を博した細工物であるが、当地方では、白珊瑚は「しろさんご」ではなく「はくさんご」と訓じた⁽⁸⁾。また、別称として「海柳」、漢名では「越王余算」、「沙箸」といった⁽⁹⁾。白珊瑚は、オオヤナギウミエラのなかまで、水深200m以下の深海に生息し、その形は長細く、海中の砂や泥に刺さって立っている。細工にはやはり骨軸を用いる。

白珊瑚細工の創始は、農商務省編纂に係る河原田盛美編『日本水産製品誌』に詳しい⁽¹⁰⁾。

【史料1】

(前略) 此製品の創始は、文政年間因幡国岩井郡浦富村故杉山重兵衛なる者⁽¹¹⁾、初めて箸を創製したるも、臭気ありて光沢なく、需用に適せざるを憂い、意志を継ぎ其男三郎工風を凝らし、嘉永年間に至り無臭にして美麗なるものを製し、爾来簾、杖、菓子器、柱隠等を製し、世人の変ずる所となり、海中の廃物を利用して、因幡の名産たらしむるに至れり、又石見国邇摩郡静間村、林善吉なるものは明治維新後之を以て箸を製して販売せり、山陰、北陸の海には、沙箸の海脈連亘し、或は三、五里乃至十里の沖合に之を産する海脈ありて、延縄を垂れば之にかかる、其延縄を用るの季は概ね十一月より翌年四、五月頃して、之を採取するや、漁者は工者に販売す、工者

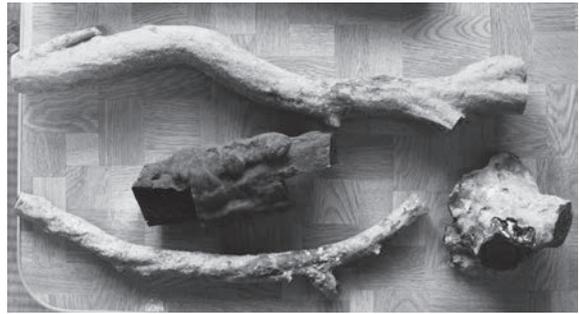


図2 黒珊瑚の骨軸



図3 青珊瑚の骨軸



図4 白珊瑚箸と楊子（個人蔵）

は直に外皮を除き去り、木賊或は角粉を以て磨き、之を平滑ならしめ、温湯に投げ能く洗いて臭気を去り、以て種々の製品を作れり、食塩を以て磨けば白色にして光沢を發す

これによると、文政年間（1818～30）に因幡国岩井郡浦富村（現・鳥取県岩美町浦富）の杉村重兵衛という人物が白珊瑚箸の製造を始めたことを端緒とする。また、その子三郎がさらに工夫を凝らして、無臭で美しい製品を作り出し、白珊瑚は本来「海中の廢物」であったものから、「因幡の名産」になったとしている。当時、白珊瑚細工を行っていた地域は鳥取県のほかに石見国邇摩郡静間村（現・鳥根県大田市静間町）であったことを記しているが、静間での白珊瑚細工は明治以降の創始とされている。

3) 江戸時代の白珊瑚細工

白珊瑚細工に関する最古の文献は、管見の限り京都の儒医で本草学者である山本慶篤が天保3年（1832）に採薬のため山陰地方を訪れた際の『山陰四州採薬記』（以下『採薬記』）である⁽¹²⁾。山本は、同年10月10日、因幡と但馬との国境に近い温泉場である因幡国岩井郡湯村（当時、岩井村とも言った。現・鳥取県岩美町岩井、図5参照）に宿泊した際、村人に白珊瑚について聞き取りを行っている。内容的に大変興味深いため長文であるが以下紹介する。

【史料2】

十日、大雨フル、岩井（現・鳥取県岩美町岩井の岩井温泉―筆者注）ニ逗留シテ温泉ニ浴ス（中略）又村中ニ白珊瑚ト云テ、筍（箸―筆者注）或ハ楊枝ニ製シテ鬻クモノアリ、此ヲ問ヘハ越王餘算ナリ、岩井ノ北、浦留ノ東、安代、田後ノ海中ニテ多ク此ヲ取ル、漁人名ケテスゲト云、此物産スルトコロ磯ヨリ二、三十里沖ノ海底ニアリ、三、四、五月ノ頃比目魚（ヒラメ―筆者注）ヲ盛ニ釣ルトキトレルト云、比目魚ヲ釣ニハ親繩ト云テ、ワラノ繩ヲ数百丈ヲツクリ、ソノ繩ヨリ細キ麻糸ヲツケ、ソノ糸ノ先ニ鉤ヲツケテ海中ニ下シ、暫クアリテ引上ルトキ、越王餘算多ク親繩ニカ、リテ上ルナリ、越王餘算長サ四、五尺、杞柳ノ如シ、理細ニシテ白シ、本ノ処ハシノフト



図5 因幡国岩井郡周辺図

サニシテ末段々ニ細シ、本ノトコロ少シフトシ、フトキ処ヨリ下ハ又淡褐色ニシテ末細ク、細キ牛蒡ノ如シ、フトキ処ヨリ上ハ水中ニアリテ下ハ沙中ニアル様ニミュ、又骨一面ニ肉ツキテアリ、肉ハ淡褐色ニシテ円ク軟ニシテ少シ扁ナリ、ソノ肉ニ岐多クワカレ、裙帯菜（ワカメ—筆者注）ノ如シ、末ノ処ハ骨ナシ、細クナリテ多ク岐レテ穂ノ如ク水ニ従テ動ク、ソノ肉至テ粘滑ニシテ臭気甚シ、漁人取り得ルトキ、ソノフトキ処ヨリ折取り、砂ニテ肉ヲシゴクトキニハ、上ノ肉ハ残ラズトレテ中ノ白骨ノミ残ル、ソノ骨ヲ集メテ岩井ニ持来リテ鬻クナリ、此物ヲ取ルコト三、四、五ノ三月ニ限ルハ、右三月ハ海上穏ナル故ナリ、田後、安代ノ二村ニ限ハ、二村因州東北ノ鬻ニシテ、尤北ニヨル故也、本草綱目、越王餘算ノ條ニ縮入沙中ト云ヘリ、此物ノ産スル処ヲ聞クニ、海底ニ生シテ縮入スル如キ活物ニアラス、ソノ本ノフトキ処ヨリ下ガ土沙ノ中ニアリテ、上ハ水ニ従テナヒクモノナリ、骨ハ初ヨリ硬シテ縮伸スルモノニアラスト云ヘリ、土人筋（箸—筆者注）ニツクリ諸国ニ鬻ク、白珊瑚箸ト云、消毒ノ効アリト云、又屑ヲ金瘡ニ傅レハ止血ノ効アリトモ云ヘリ

山本の『採薬記』は、江戸後期の「白珊瑚」の生態からその捕獲方法まで詳細でたいへん参考になる。これによると、①白珊瑚はカレイの延縄漁の親縄に偶然引っかかるもので、②カレイ漁は、岩井郡の田後と網代（現・鳥取県岩美町田後および網代）の漁師が沖合 20～30 里（約 80～120 km）で行い、漁期は旧暦 3～5 月の 3 ヶ月であった。③白珊瑚のことを漁師は「スジ」と言っていた。④海中から引き揚げた際の白珊瑚の大きさは 4、5 尺（約 120 cm～150 cm）にも及び、「細キ牛蒡」のようであった。⑤陸揚げされた白珊瑚は、砂に入れてしごき、外側の肉を取り外し、細工につかう骨（骨軸）だけにし、その白珊瑚の骨をとりまとめて温泉場で宿場でもある湯（岩井）村に売っていた。⑥白珊瑚の箸には消毒（毒消しの意）の効き目があるとして販売され、細工品を加工する際に出た削りかすは、切傷の止血に効果があるとされていた。⑦当時すでに白珊瑚箸は「土人」（土地の人）によって諸国に販売されていた。なお、⑦について、当時京坂地方へ赴く旅人は「鳥取土産」の一つとして必ず携行したとされ⁽¹³⁾、一次史料においても、幕末の鳥取藩士岡崎平内が大坂商人との金談のため上坂した際、土産として「白珊瑚箸」を持参しており⁽¹⁴⁾、手軽な土産品とされていたことを知りうる。

山本の『採薬記』において、白珊瑚は他に見られないほど紙片を費やしており、岩井温泉における白珊瑚細工が珍奇に映っていたことが知られる。本草学者である山本は「白珊瑚」のことを「越王余算」と認識していた。享和 3 年（1803）刊の本草学者小野蘭山『本草綱目啓蒙』では、たしかに白珊瑚は「越王余算」とされており⁽¹⁵⁾、白珊瑚という呼称は方言であることがわかる。

また、白珊瑚箸の効能として宣伝されていた毒消しとはどのようなものか。『本草綱目』によると越王余算の効能は、「水腫（むくみ—筆者注）・浮気（落ち着きのない状態—筆者注）・結聚（腹の腫れ—筆者注）・宿滞不消（消化不良—筆者注）・腹中虚鳴（腹鳴り—筆者注）」とあり、煮出してその煮汁を服用するとある。さらに、万延元年（1860）成立の鳥取藩の本草学者平田景順（眠翁）『因伯産物薬効録』では⁽¹⁶⁾、白珊瑚を「因州の名産なり」とし、「解凝利水（こりをとくしやうべんをつうじ）の功あり」と利尿効果を記す。諸書に毒消しという効能は記されていないが、おそらく胃腸や腎臓など内臓疾患に対する効能であったと考えられる。『本草綱目』にあるように煮出して用いるのではなく、箸として用いる点がユニークである。さらに、削りかすを止血に用いることは当地方独特の効能であった。

さて、白珊瑚の捕獲はカレイ延縄漁によっていたが、この延縄漁自体は「岩井郡網代・田後ノ二ヶ村ヲ以最モトス」とされ⁽¹⁷⁾、時代によって漁期は異なるがおおよそ 11 月から翌 5 月頃に行われ

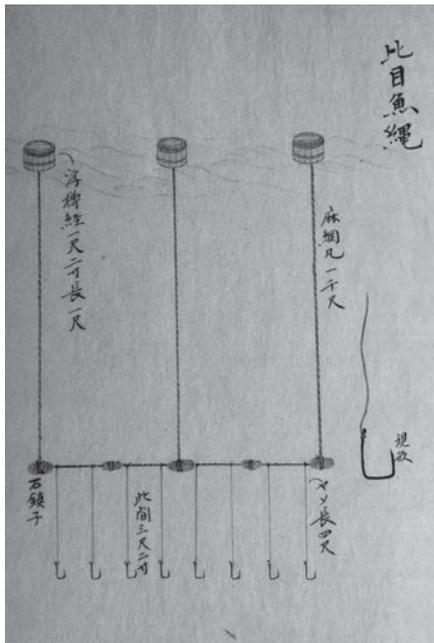


図6 カレイ延縄漁具（島根大学付属図書館蔵「因幡伯耆魚漁図解」）

た⁽¹⁸⁾。漁場は「因伯魚漁図解」によると⁽¹⁹⁾、網代の場合、港より10～15里（約40～60 km）の沖合の水深800～1,000尺（約240～300 m）の海域で行われた。漁具は図6のとおり、海底近くまで垂らした3筋の縦糸に横糸を結びつけ、横糸に3尺2寸（約96 cm）ごとに「ヤメ糸」と呼ばれる釣り針をかける糸を垂らしたもので、この針に底魚のカレイが食い付いた。そして、カレイと同じ漁場に生息する白珊瑚は、この釣り針に引っかかった。餌はイワシ・イカ・ハマグリなどで、漁労に従事するのは船1隻（7、8人乗り）で昼間に行われた。江戸時代、水揚げされたカレイのうち、「ムシガレイ（蒸鰈）」と呼ばれる種類は⁽²⁰⁾、塩魚にされ鳥取藩によって毎年旧暦12月に徳川将軍家に献上されていた⁽²¹⁾。このカレイの延縄漁の副産物として、白珊瑚とともに鳥取特産の「松葉がに（ズワイガニ）」があった⁽²²⁾。

2. 明治期鳥取の珊瑚細工の隆盛

1) 明治時代の珊瑚細工

前章で白珊瑚細工は江戸時代後期から行われていたことを紹介したが、その産地は主に因幡国内の岩井郡湯村と浦富村（ともに現・鳥取県岩美町）であった。江戸時代の白珊瑚細工は、生産が岩井郡、販売の中心が近隣の城下町鳥取であったと考えられる。幕末の鳥取城下には白珊瑚細工職人がわずか1軒（1人）のみで、未だ鳥取の町において生産が盛んではなかった⁽²³⁾。製造から販売まで鳥取で一貫して行う業態は、明治以降で筆者は少なくとも明治10年代から20年代頃でなかったかと推測している⁽²⁴⁾。

一方で白珊瑚細工が鳥取の名産であるという認識は明治初年にはすでにあつたようで、鳥取にやってきた外国人に対する鳥取土産として使用されている。明治9年（1876）、明治政府の御雇外国人エッセルが千代川治水工事と賀露港（現・鳥取市賀露）の指導助言のため鳥取県に招請された際⁽²⁵⁾、白珊瑚細工を土産として貰っているが、「海岸沿いの大変深いところに生息する白い海藻の一種白珊瑚で作られた品々」とわざわざ記している。

明治20年代には、「従来箸若クハ楊枝ヲ製造スレドモ、亦洋杖、短冊懸ケ、筆巻トシ京撰地方へ輸送シ、過般宮内省へ御買上ケナリシコトモアリ、従来世人ノ賞愛ヲ博シ、需用尠カラサレトモ、原品採獲額甚少ニシテ、為ニ盛大ニ製出スルヲ得ス、現今採獲額一箇年凡一万六千本ニシテ、此製造金額凡二百円内外ナリト云フ」と⁽²⁶⁾、白珊瑚の箸・楊子・洋杖・短冊掛・筆巻き等を京阪神方面へ輸送し⁽²⁷⁾、また宮内省へ買い上げとなることで「世人ノ賞愛ヲ博シ」ていたことが知られる。

明治以降、ステッキや写真掛など洋風のもので制作されるようになり、素材も白珊瑚だけでなく、黒珊瑚（海松）も徐々に用いられるようになった。黒珊瑚（海松）細工が創始された年代は記録上判然としないが、江戸時代の文献には出てこないこと、さらに明治以降の文献には明治20～30年頃から見られることから、明治以降の創始と考えられる。また、青珊瑚細工の創始についても、確たる資料が存在しないため不明である。しかし、昭和4年（1929）生まれの珊瑚細工職人岡田

省三氏がすでに物心がついた頃には製造していたということ、さらに後述する白珊瑚細工の原料不足による代替品として登場してきたと推測できることから、昭和初年頃の創始と推定しておきたい。

2) 明治の博覧会と皇室献上

鳥取の珊瑚細工は、明治40年代には押しも押されぬ鳥取の重要産物となっていたようである。明治40年(1907)発行の『鳥取案内記』には⁽²⁸⁾、「当市の特有名物とも称すべきものは白珊瑚・海松細工なり」とあり、製品も箸のほか、ステッキ、写真掛、パイプ、煙管、筆立、筭、置物などいろいろな種類が製造されていた。明治期に鳥取の産物として珊瑚細工が名声を得ていく大きなきっかけとして、第1に数多くの国内外の博覧会へ出品し賞を受賞したこと、第2に皇室や皇族への献上が挙げられる。

明治時代は「博覧会の時代」と呼ばれる程数多くの博覧会が催され、とくに殖産興業や国威発揚などを意図し、国内で5回催された内国勸業博覧会(以下、内国博覧会とする)は最も著名である⁽²⁹⁾。まず、内国博覧会への出品では、明治10年(1877)東京上野で開催された第1回以降、全5回開催されたすべての博覧会に出品し、賞などを受賞している⁽³⁰⁾。出品者も、第1回内国博覧会は「小卓(海柳寄作)・印筆筒(海柳黒柿寄作)・短冊掛(海柳寄作)」を出品した野坂勇次郎(花紋賞牌受賞)だけであるが⁽³¹⁾、明治28年(1895)の第4回内国博覧会(京都)には出品者が米谷豊蔵・野坂勇次郎・老門清次郎・岡田べん・武田要次郎と増加し⁽³²⁾、出品物も白珊瑚の箸といった伝統的なものとともに、杖(ステッキ)や写真掛といった洋風な品物も出陳されている。

また、万国博覧会には、すでに明治6年(1874)オーストリアで開催された第1回ウィーン万国博覧会に出陳している⁽³³⁾。さらに明治37年(1904)アメリカで開催されたセントルイス万国博覧会に出品していた⁽³⁴⁾。セントルイス万国博覧会には、岡田省三氏の祖父にあたる岡田長太郎が「鳥取県海松白珊瑚製造組合」名義で出品し⁽³⁵⁾、金賞を受賞している。

このほか、農商務省主催の水産博覧会にも出品している。明治30年(1897)に神戸市で開催された第2回水産博覧会には、第2部製造第5区薬用工用及雑用品の第45類雑用品で出品しているが、この第45類には鼈甲、珊瑚、真珠、鯨髭、鉄樹(海松、黒珊瑚のこと)、砂箸(白珊瑚のこと)等が含まれていた。本博覧会の『審査報告』によると⁽³⁶⁾、「海柳(白珊瑚のこと—筆者注)ノ本場ト云フヘキハ鳥取県ニシテ、次ヲ鳥根県トス」とあり、博覧会審査員ら(工芸家の塩田真、河原田盛美、吉岡哲太郎)には、当時すでに白珊瑚細工=鳥取の名産品という認識があったことが知られる。同報告には白珊瑚製の杖の創始について記されており、これによると鳥取市新町堀辰蔵が明治15、16年(1882、3)頃に新案したとされ、同博覧会では蒸気を用いた接着法により進歩3等賞が授与されている。さらに、同博覧会では鳥取市川端花岡源七、同若桜町福田虎蔵、同新鑄物師町半田勉、同町老門清次郎が有功3等賞を授与されている。

次に、皇室への献上であるが、すでに明治10年代には宮内省買い上げの事例が見られるが⁽³⁷⁾、明治40年(1907)の嘉仁皇太子(のちの大正天皇)の山陰行啓時の献上が代表的であろう。同年5月鳥取に行啓した皇太子は、滞在中、各所から種々の献上を受けた。このとき鳥取市長が献上した品物は、「杉森葛三斤・竹形海松製洋杖・写真帳一冊・白珊瑚絵葉書差二個・香魚五百尾」であった⁽³⁸⁾。このほか、皇太子は県内の産物の買い上げを行っているが、そのなかには白珊瑚の箸や洋杖、写真掛、海松の洋杖とパイプが含まれていた⁽³⁹⁾。なお、皇太子に献上・買い上げとなった杖と同類と思われるものが、初代鳥取市長岡崎平内所用のものとして鳥取県立博物館に伝わっている(図7)。また、『みやげの葉』によると⁽⁴⁰⁾、昭和初年までに秩父宮雍仁親王・三笠宮崇仁親王・満州国皇帝溥儀などに献上されていたことが知られる(図8)。



図7 白珊瑚・黒珊瑚のステッキ (鳥取県立博物館蔵)

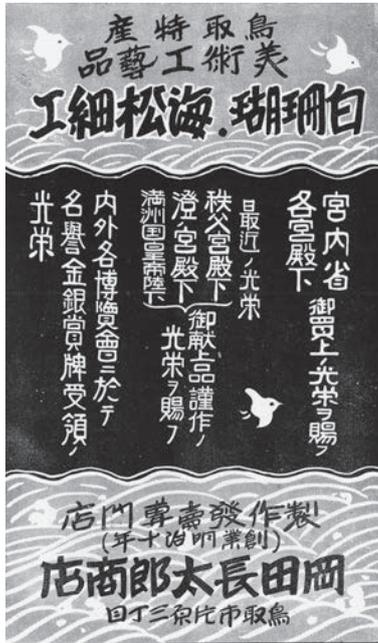


図8 岡田長太郎商店チラシ (『みやげの葉』所収)

各種博覧会への出品・受賞、皇室への献上等という社会的名声を得るなか、販売数の増加という点で見逃せないのが明治45年(1912)の京都一出雲今市間の山陰本線開通であろう。交通網の整備によって鳥取への入込客は増え、細工物は販売額を伸ばした。当時の新聞記事によると、鉄道開通直後の鳥取県物産陳列場(鳥取市西町)の売れ筋の土産は珊瑚細工(白珊瑚と黒珊瑚)と絵ハガキとされていた⁽⁴¹⁾。実際に物産陳列場における大正2~6年(1913~17)の委託販売品のうち最大の販売額を持っていたのが珊瑚細工であった⁽⁴²⁾。

地元の鳥取市では、珊瑚細工を殖産勸業の重要品目としており、販売促進のために種々の方策が打たれていた。例えば、明治29年(1896)3月に鳥取市で開催された鳥取県中央勸業会主催の製産物品評会では、原料の確保問題や販路拡大について検討されている⁽⁴³⁾。また、日露戦争終結後の明治39年(1906)には、鳥取市商工会が市産品の販路拡大を目指して満州と韓国に視察団を派遣したが、その調査9品目のなかに白珊瑚細工が入っていたことが知られる⁽⁴⁴⁾。

このように、明治期の鳥取の珊瑚細工は各種博覧会への出品・受賞、皇室への献上を通じて

社会的な名声を得、鉄道開通という近代交通の発達によって売上げを伸ばしていった。さらに製品も「毒消し」という本草学的効能をうたう伝統的な箸や楊子からステッキや写真掛、パイプ、ネックレスなど近代にふさわしい商品開発もなされた。この過程が地元の人々に鳥取が日本一の産地であることや珊瑚細工自体のユニークさを認識させたことは間違いなく、明治期はまさに鳥取の珊瑚細工の隆盛期と言える時代であった。

3) 河原田盛美と珊瑚細工

鳥取の珊瑚細工を語る際に欠かせない人物として河原田盛美がいる。河原田は、明治期の水産界の権威者のひとりとされ、農商務省の技手として水産指導のため全国を巡回した⁽⁴⁵⁾。鳥取県にも明治21年(1888)1月頃に水産重要品調査のため来県、県下を巡回し、講話等も行っている⁽⁴⁶⁾。河原田は、鳥取県来訪直後の同年7月、石川県で行った水産講話のなかで「白珊瑚細工ノ説」として鳥取の白珊瑚細工について紹介している。すなわち、「ウミヤナギハ植蟲類ニシテ、之ヲ白珊瑚ト仮称シ、因州鳥取・石州安濃郡等ニテハ種々ノ細工品トス、縣下金石港沖合十二、三里ノ海上ヨリ二十里許リノ海底ハ百尋ヨリ二百尋直チニシテ鱈這繩ヲ為スニ、方言『ブチ』ト称スルモノ、彼繩ニ纏ヒ引上クルコトアルモ、皆放棄セリ」と⁽⁴⁷⁾、同じ日本海側の金石港(現・金沢市金石西)の沖合でも白珊瑚が鱈延縄に引っかかることがあったが、すべて廃棄されていたとしている。河原田は、漁村において白珊瑚を廃棄せず、美術工芸が盛んな金沢で白珊瑚細工を行い利潤を得れば、

「何ソ独り因・石二州（因幡と石見国一筆者注）ノ特産ニ止マランヤ」としている。

河原田は、明治22年6月に鳥取県下の巡回を命じられ再度来県した。巡回中の7月には鳥取県から「私立因伯水産共進会審査長」を委嘱されている。この因伯水産共進会は、明治22年8月1日から7日まで鳥取市本町1丁目の三育尋常小学校を会場に開催されたもので、県下の水産業の振興を意図して開かれた⁽⁴⁸⁾。出品数は500点以上、そのうち394点が審査対象とされ、なかには河原田が県下巡回中に地元住民らと製造したものもあった。また、本会の参考品の出品者として、大日本水産会や県農商課などとともに河原田自身も名を連ねていた。この共進会では、珊瑚細工も出品・受賞しているが、なかでも注目されるのが、県下水産業に功績のあった物故者に贈られる「追賞」である。本賞は審査員の推薦によるもので、その受賞者は「砂箸細工功劳」の岩井郡浦富村（現・鳥取県岩美町）の故杉村三郎と気多郡青谷村（現・鳥取市青谷町）「板谷貝柱販売」の故山田与五郎の2名であった。このうち、杉村の受賞理由は、父重兵衛の遺志を継ぎ、白珊瑚細工を確立したというもので、その推薦文は史料1で示した河原田編にかかる『日本水産製品誌』の「海柳」の項目とほぼ同内容である。おそらく、河原田は県下巡回中ないしは共進会で故杉村父子のことを知り、共進会の追賞の推薦文をもとに当時編纂中であった『日本水産製品誌』の「海柳」部分を執筆したものと考えられる⁽⁴⁹⁾。

河原田が白珊瑚細工に注目したのは、本来廃棄される水産物を民間の知恵で産品化したことであったが、もう一つ当時の水産関係者に日本海側の白珊瑚生息域に注目が集まっていたことも関係していると考えられる。農商務省農務局が明治24年（1891）に行った水産調査報告『水産調査予察報告』によると⁽⁵⁰⁾、白珊瑚（海柳）は日本海側では「ブチ」と呼ばれ、主に水深120～130尋線（約216～234m）の深海に、西は隠岐島（現・島根県）から東は珠洲岬の沖合（現・石川県珠洲市）に及ぶ範囲に帯状に生息していたという。「伯州（現・鳥取県中西部）」においては沖合30海里（約56km）まで出なければ見られないが、但馬（現・兵庫県北部）・丹後（現・京都府北部）においてはわずか14、5海里（約26～28km）で見られるという。沖近くに生息するものを「灘ぶち」、沖から遠くに生息するものを「沖ぶち」といった。「ブチ」が帯状に繁茂するところを同書では「ぶち帯」と呼んでいるが、「ぶち帯」はカレイ、タラ、ズワイカニなど深海に生息する魚族の格好の漁場として注目されていたらしく⁽⁵¹⁾、農商務省による水産調査はこの「ぶち帯」把握に力が入れられていた。

このように、河原田は鳥取県への水産指導の過程で鳥取の珊瑚細工を知り、他県での水産講話で取りあげたり、自身の編さん書に取り入れることになったのである。珊瑚細工が河原田に注目されることによる地元の反応がわかる資料は管見の限り見られない。しかし、当時の水産界の権威のひとりに注目されることで、鳥取の珊瑚細工関係者らが珊瑚細工のユニークさを再認識する機会となったことは間違いのないであろう。

3. 鳥取の珊瑚細工の低迷

1) 明治末から昭和初年の珊瑚細工の生産状況

明治期を通じて鳥取を代表する産物としての地位を固めた珊瑚細工であったが、次に明治末から昭和にかけての生産額・製造場数・職工数の推移を表1から見てみたい。なお、この統計データは昭和13年（1938）度までしかない。生産額では大正9年（1920）と昭和8年（1933）をピークとして年額6万円以上を記録している一方、金額が上下することがしばしばあったことも読み取れる。大正9年は66,500円の生産があったが、これは同年度の鳥取市歳入339,680円と比較すると約

表1 明治末から昭和10年代の珊瑚細工生産状況

	製造場数	職工数	生産額(円)
明治39年	14	26	4,070
明治40年	12	22	3,564
明治41年	11	34	6,412
明治42年	11	27	9,900
明治43年	9	31	7,617
明治44年	9	37	11,700
大正元年	10	39	15,324
大正2年	10	39	17,823
大正3年	10	39	18,310
大正4年	10	39	16,140
大正5年	10	33	16,500
大正6年	10	34	30,590
大正7年	8	30	24,448
大正8年	8	30	28,800
大正9年	9	37	66,500
大正10年	9	37	60,000
大正11年	8	36	58,000
大正12年	4	18	15,000
大正13年	5	9	11,950
大正14年	5	9	8,720
昭和元年	5	15	15,050
昭和2年	4	9	7,080
昭和3年	4	8	7,675
昭和4年	4	12	15,000
昭和5年	5	9	13,000
昭和6年	6	10	5,935
昭和7年	6	10	60,120
昭和8年	6	10	70,500
昭和9年	6	10	66,000
昭和10年	6	12	62,400
昭和11年	5	10	60,000
昭和12年	5	16	21,860
昭和13年	5	15	26,000

『鳥取県百年の統計』(鳥取県企画部統計課、1982年)より作成。

2) 大正・昭和初年の珊瑚細工生産と漁業問題

まず、大正12年(1923)頃の状況は『鳥取新報』同12年1月27日の記事が参考になる。それによると、「是等(珊瑚細工一筆者注)の材料は各商店が競って漁村と特約して買うのであるが、原料が少ないので相当の老舗を除いては何れも原料不足の為め、乱造を避けて成る可く少ない原料で立派な製品を作る様にしている(中略)一時原料に不足を告げた時代があって、是等の職人が他の仕事に転業したが、他の仕事をするところの細工物は辛気臭いと言って、職工の大不足を告げ、今は引っぱり風の有様です」と、原料となる珊瑚が不足し、細工職人が他の仕事に転職したため人手不足という状況であったのである。

なぜ材料不足に陥ったのか。そもそも原料の漁獲は、宝石サンゴのような専門漁が存在した訳ではなく、明治末・大正期に入っても江戸時代以来の伝統的なカレイ延縄漁に拠っていた。原料確保の問題は、珊瑚細工が産業化を目指す際の最大のネックであったようで、珊瑚細工業者らは明治36年(1903)「鳥取白珊瑚海松製品原料購買組合」を組織し⁽⁵³⁾、原料を共同で調達しようと試みたほか、原料調達を県内だけでなく出雲(現・鳥取県東部)から越後(現・新潟県)までの日本海側地域より輸入を企図していた⁽⁵⁴⁾。

こうしたなか、大正末にカレイ延縄漁に大きな変化が見られた。田後村の延縄漁は、「大正八年頃、機船漁業ニ変更スルヤ、底曳網漁業モ機船ノ経営スル処トナリ一大改革ヲ来タシ、如何セン理想漁業タル釣縄漁業ハ、漁場ノ荒廃ヨリ来ル衰微トナリ」、「漸次漁獲ノ減額ヲ見ルニ至リテ現在ニ

20%にあたる額で⁽⁵²⁾、地元における産額の大きさが知られる。

また、製造場数は明治39年(1906)の14か所が最も多く、以降漸減し、大正末には5、6か所となっている。職工数を見ると、明治39年から大正11年(1922)までは20~40人弱となっているが、大正12年を境に半減を繰り返して、昭和に入ると10~15人前後で推移している。製造場と職工数を比較すると、1工場あたり職工2、3人と小規模であり、経営形態も家族経営に近いものであったことがわかる。なお、これらのデータからは、明治末から大正11年までは生産額・職工数ともに増加傾向にあったが、大正12年に一気に減少し、その状態が昭和6年まで続いたことが読み取れる。さらに、昭和7年から同11年までの生産額は大正末年のレベルまで回復しているが、職工数や製造場数は増えていない。昭和12年には生産額も大幅に落ち込んでいる。以上から、大正12年および昭和12年に生産額等において大きな画期があったことがわかる。それでは、この両年に何が起こったのか、項を改めて検討したい。

テハ僅ニ形態ヲ残スノミ」と⁽⁵⁵⁾、大正8年(1919)に「一大改革」というべき発動機付の底引き機船が導入されて以降、漁場が荒廃し、伝統的「理想漁業」である延縄漁が衰微したというのであった。鳥取県の水産史では、カレイ延縄漁は明治40年代に手繰網と紛争を起こしていたことは知られるが⁽⁵⁶⁾、その直後、機船底曳き網と競合し、漁場の荒廃を招き、そして衰退の一途をたどった。

鳥取県内への機船導入の端緒は、明治44年(1911)の日本海丸である。その後、県内で機船底曳き網漁業が行われるようになったのは大正6年(1917)とされ、延縄漁が盛んであった現・鳥取県岩美町域の漁村では、同7年に網代村・大岩村、同8年に田後村に導入された。田後村では、以降機船底曳きが急速な発展を見て、大正10年14隻、昭和元年24隻、同5年60隻、同10年76隻と増加した⁽⁵⁷⁾。ちなみに、大岩村を拠点とした奥田亀蔵は明治38年(1905)大阪で木造トロール船海光丸(152トン)を建造し、日本で最初のトロール漁業を行ったことで知られるなど⁽⁵⁸⁾、同地域は鳥取県内の漁業先進地であった。

こうした漁業の「一大変革」による漁場の荒廃は、漁獲量に如実に表れた。表2は明治末から昭和初年における田後村の隣村である網代村のカレイの水揚げ量と販売額の変化を示したものである。これによると、カレイの漁獲量は明治40年代をピークに減少し、大正12年(1923)から昭和5年(1930)にかけてほとんど漁獲がなくなっている。昭和6年以降は販売額だけの記載の年もあるが昭和7年の漁獲量・販売額から推測すると昭和6年から逆に漁獲量が増えている。これは、統計データが昭和5年までは旧来の延縄漁の漁獲高のみであったものが、翌6年以降は底曳き機船の漁獲高も含むようになったため統計上増加に転じたと考えられる。機船の導入は漁場荒廃の一因となるが、一方で漁場を広域化できるため漁獲高の増加につながったのである。再度、珊瑚細工の生産額をまとめた表1を見ると、大正末から昭和初年の漁場の荒廃による延縄漁の衰退と機船導入後のカレイ漁獲量増加という状況は、珊瑚細工の生産額の推移とほぼ一致していることがわかる。

3) 戦時体制と珊瑚細工

次に、珊瑚細工の生産高が激減した昭和12年について見ていく。同年は日中戦争(支那事変)の勃発の年であり、これが大きな画期になったものと思われる。戦時体制が強化される中、壮年の男性漁業者は戦地へと出征し、船舶やその燃料は軍事用途が優先されるなど、漁業者にとって不遇の時代であった。この時期、実際に鳥取県全体の漁獲量も激減した。例えば、昭和6年度(1931)の県内総漁獲量は342万123貫(約12,825トン)であったが、終戦の年である昭和20年度(1945)には半分以下の150万6,321貫(約5,649トン)まで減っている⁽⁵⁹⁾。漁獲量全体が下がるなか、珊

表2 明治末～昭和初年の網代村におけるカレイ漁獲

	漁獲量(貫)	販売額(円)
明治36年	13,600	4,080
明治37年	15,000	6,500
明治38年	15,000	6,500
明治39年	25,000	7,500
明治40年	30,000	9,000
明治41年	35,000	7,000
明治42年	32,000	9,600
明治43年	27,000	8,100
明治44年	16,200	4,860
大正元年	11,340	4,536
大正2年	5,600	3,360
大正3年	7,500	3,750
大正4年	450	2,497
大正5年	2,017	1,210
大正6年	2,000	1,600
大正7年	1,300	1,950
大正8年	1,800	5,040
大正9年	1,500	4,500
大正10年	1,000	3,500
大正11年	500	400
大正12年		
大正13年		
大正14年	25	100
昭和元年		
昭和2年		
昭和3年		
昭和4年		
昭和5年		
昭和6年		13,041
昭和7年	54,065	16,095
昭和8年		12,910
昭和9年		13,545
昭和10年		17,842

『網代村誌』第9編(岩美町立網代コミュニティーセンター蔵)より作成。

珊瑚細工に必要な原料の確保が困難を極めたであろうことは容易に想像される。

また、戦時中の昭和16年(1941)8月には珊瑚細工に価格統制が行われ、箸や楊子、パイプ、ステッキなど白珊瑚と黒珊瑚細工製品80種以上に最高卸売り価格と小売り価格が公定化されており、商売自体が戦時統制下に置かれていたことがわかる⁽⁶⁰⁾。

戦時体制を経て、人もモノも欠乏するなか終戦を迎える。終戦後の状況は不明な点が多いが、岡田省三氏によると、原料不足により珊瑚細工に携わる人々が減少していったとする。原材料の問題もあるが、細工の担い手たる職工も多く職を離れ、鳥取の珊瑚細工は衰退の時を迎えていく。

おわりに

本稿では、鳥取の珊瑚細工の歴史の変遷を紹介したが、以下簡単にまとめておきたい。

鳥取の珊瑚細工は、江戸後期の文政年間(1818~30)に創始された「白珊瑚細工」を起源とした。この「白珊瑚」は、当時の本草学的認識では「越王余算」と言い、白珊瑚という名称は地方独特のものであった。この白珊瑚細工は、19世紀前半には毒消し効果を銘打った楊枝や箸として因幡国岩井郡の岩井温泉を中心に、諸国へ販売されていた。

明治期になると、生産拠点が岩井郡から鳥取市へと変わり、白珊瑚や黒珊瑚等の珊瑚細工を生業とする者が増加した。明治10~30年代にかけて内国勸業博覧会をはじめとする各種の博覧会に出品し、賞を受賞したほか、皇室等へ献上されることで内外の名声を獲得する。この過程でステッキや写真掛など近代的な商品開発も進み、さらに鉄道開通も相まって販売額も増大する中で鳥取の珊瑚細工は隆盛を迎える。

しかし、鳥取の珊瑚細工は産業として発展させたいという思惑と、一方で増産を阻む慢性的な原料確保の不安というディレンマを抱えていた。この問題が噴出したのが、大正末から昭和初年であった。大正時代になると細工の原料となる珊瑚を捕獲していたカレイの延縄漁が機船底曳き漁の展開とともに衰退し、珊瑚細工自体も一時下火となる。その後回復の兆しを見せたが、昭和12年(1937)に勃発した日中戦争以降、戦時統制によって再度衰微してしまった。終戦後、かつての隆盛を取り戻すことなく、鳥取の珊瑚細工は歴史の表舞台から姿を消していったのである。

最後になりましたが、拙稿をまとめるにあたり珊瑚細工全般につき貴重なご証言・ご教示をいただきました岡田省三・敬子ご夫妻、サンゴの生態についてご教示いただいた鳥取環境大学徳田悠希氏、白珊瑚細工の実物をご提供いただいた岩成美千代氏、鳥取の珊瑚細工に関する文献をご教示いただいた大田勝也氏に末筆ながら感謝申し上げます。

注

- 1) 岡田敬子「消えゆく手仕事 海松細工」(『鳥取民俗懇話会会報』8号、2009年)。
- 2) 『珊瑚の文化史—宝石サンゴをめぐる科学・文化・歴史』(東海大学出版会、2008年)、『珊瑚—宝石珊瑚をめぐる文化と歴史』(東海大学出版会、2011年)。
- 3) 拙稿「鳥取の珊瑚細工とその歴史」(高田健一ほか編『錦織勤先生ご退職記念文集』、錦織勤先生ご退職記念文集刊行会、2015年)。本稿で紹介していない資料も掲載しており、あわせて参照いただきたい。
- 4) 例えば、明治30年(1897)の第2回水産博覧会には、「鉄樹及其製品」の出品者として東京府、三重県、鳥根県、京都府、大阪府、兵庫県、愛媛県、高知県、福岡県、大分県、沖縄県などが挙げられている(『第2回水産博覧会審査報告』農商務省、1899年、287頁)。
- 5) 椋木賢治「〈作品紹介〉石見根付(鳥根県立石見美術館保管)」(『鳥根県立石見美術館研究紀要』第8号、2014年)、『古美術 緑青』20号(マリア書房、1996年)など。

- 6) 『本草綱目啓蒙』48巻、巻之15（国立国会図書館特1-109、国立国会図書館デジタルライブラリー）。黒サンゴの生態やアラブでの黒サンゴ数珠の加工流通については、縄田浩志ほか「紅海産黒サンゴの生態・採取・加工—イスラームの数珠がつなぐ自然と文化」（西本真一・縄田浩志編）『アラブのなりわい生態学5サンゴ礁』（臨川書店、2015年）が詳しい。本書については、著者の縄田氏よりご教示いただいた。
- 7) 岡田省三氏からの聞き取りは、2014年2月13日、6月30日に行った。
- 8) 岡田省三氏のご教示による。
- 9) 「越王余算」および「沙箸」は中国・明の李時珍が1596年に刊行した『本草綱目』に掲載されている。
- 10) 農商務省水産局編『日本水産製品誌』（水産社、1935年）664、665頁。編者である河原田盛美の「緒言」によると、明治20年（1887）に農商務省水産局員であった編者が編纂の命を受け、明治27年に補訂が完成したという。刊行は大正2～4年（1913～15）にかけて行われた。
- 11) 杉山重兵衛は「杉村重兵衛」の誤り。『私立因伯水産共進会報告』（私立因伯水産共進会基本人物代中嶋孝治、1889年）による。
- 12) 『山陰四州採葉記』（山本篤慶『採葉記』6、7巻、函号17—番号40、西尾市立岩瀬文庫蔵）。テキストは平田眠翁著、生駒義博・生駒義篤校訂『因伯産物薬効録』（雄松堂書店、1982年）353～380頁に翻刻所収されている。
- 13) 『因伯の人情と風俗』（因伯史話会、1926年）88、89頁。
- 14) 「御着坂御歓其外到来物覚」（『旧鳥取藩士岡崎家資料』93、鳥取県立博物館蔵）。
- 15) 前掲『本草綱目啓蒙』巻之15。
- 16) 前掲『因伯産物薬効録』85頁。
- 17) 明治23年（1890）の「鳥取県漁具図解」（東京海洋大学附属図書館蔵）。
- 18) ただし、カレイの延縄漁の漁期は、文献によって若干異なる。明治14年3月の調査によると、網代村では10月より翌年5月（鳥根大学附属図書館蔵「因幡伯耆魚漁図解 上」、伊藤康宏『山陰の魚漁図解』（今井出版、2011年）では「因伯魚漁図解」の資料名で116、117頁に掲載）、明治20年代は11月から4、5月頃（『日本水産製品誌』、史料1参照）、明治40年代は11月から3月末頃とされている（岩美町立網代コミュニティーセンター蔵『網代村誌』第9編）。
- 19) 前掲『山陰の魚漁図解』116、117頁。
- 20) 現在、鳥取県内ではミズガレイ、モンガレイとも呼ばれる。
- 21) 『鳥取藩史』第3巻（鳥取県立鳥取図書館、1970年）493頁。鳥取藩では、「月次（つきなみ）献上」と称して毎月藩内の産物を将軍に献上した。「蒸鰈」は毎年12月の献上品であったが、文政年間から2月の献上品とされた。
- 22) 前掲『網代村誌』によると、「鰈延縄」についての説明のなかに「副漁獲物」として「鱈・蟹・白珊瑚・海松・バイ」とある。
- 23) 津田伝兵衛『警備考（上）』（鳥取県立博物館蔵、鳥取藩政資料12619）。
- 24) 鳥取を代表する珊瑚細工製造販売店岡田長太郎商店の創業は明治11年（1876）とされている（『御成婚記念因幡之葉 鳥取ノ巻』（山陰興信所編纂所、1926年、鳥取県立博物館蔵）。ただし、『みやげの葉』（鳥取名産製造組合、1934年、鳥取県立博物館蔵）では創業を明治10年としている）。
- 25) 『蘭人工師エッセル日本回想録』（福井県三国町、1990年）138頁。本資料は伊藤康氏からご教示いただいた。
- 26) 『官報』第1329号（明治20年2月2日）19頁。
- 27) 『生産力物価輸出入調査及農事統計表』（鳥取県農商課、1890年）20頁裏によると、明治22年度は神戸方面に3,270個、255円輸出していたことが知られる。
- 28) 『鳥取案内記』（明治40年（1907）発行）68頁。
- 29) 明治時代の博覧会については、国雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策』（岩田書院、2005年）、同『博覧会と明治の日本』（吉川弘文館、2010年）などを参照のこと。
- 30) 当時の博覧会出品ないし受賞目録を見ると、鳥取の珊瑚細工が数多く出品されている。これについては、他の鳥取県の出品物を含めて後日検討したいと考えている。なお、前掲『御成婚記念因幡之葉 鳥取ノ巻』によると、岡田長太郎商店は各地の博覧会に50回以上出陳したとある。
- 31) 『明治10年内国勸業博覧会出品目録』（内国勸業博覧会事務局、1877年）鳥2ノ1。出品分類は、第2区第5類（製造物造家並ニ居家需要ノ什器）であった。
- 32) 『第4回内国勸業博覧会出品部類目録』第1部・工業・下（第4回内国勸業博覧会事務局、1895年）619、622頁。出品分類は第6類（衣服裝飾具其他雑品）および第9類（革骨介毛等ノ製品）であった。
- 33) 東京国立文化財研究所『明治期万国博覧会美術出品目録』（中央公論美術出版、1997年）198頁。

- 34) 前掲『明治期万国博覧会美術出品目録』361頁。
- 35) 前掲『御成婚記念因幡之葉 鳥取ノ巻』29頁。同書によると、県の指定を受けて出品した旨が記されている。
- 36) 前掲『第2回水産博覧会審査報告』287頁。
- 37) 前掲『官報』第1329号。
- 38) 角金次郎編『山陰道行啓録』（1907年）74-76頁。
- 39) 珊瑚細工のうち買い上げを受けた人物は、岡田長太郎・八尾寿太郎・老門清次・花岡梅蔵・松森菊蔵であった（前掲『山陰道行啓録』77-78頁）。
- 40) 『みやげの葉』（鳥取名産製造組合、1934年）。同書には、白珊瑚細工店として岡田長太郎商店のほか、老門商店、西村商店、松亀向出店、八尾春一商店のチラシが掲載されている。
- 41) 宮地竹峰『鐵道開通 山陰の葉』（博進堂書店、1871年）41頁。本書は宮地が明治44年から明治45年にかけて『鳥取新報』紙上に執筆した鉄道関係記事を抜粋し一書としたもの。
- 42) 『大正6年業務報告』（鳥取県物産陳列場、1918年）22頁。
- 43) 『新修鳥取市史』第4巻、経済編Ⅰ（鳥取市、2014年）110頁。
- 44) 前掲『新修鳥取市史』第4巻、経済編Ⅰ、118頁。
- 45) 池田哲夫「水産翁河原田盛美について」（『民具マンスリー』第23巻第2号、神奈川大学日本常民文化研究所、1990年4月）10-22頁。
- 46) 巡回時の講話は『農商務属河原田盛美水産講話筆記』（鳥取県第一農商課、1889年）としてまとめられている。
- 47) 河原田盛美『水産講話筆記』（石川県勸業課、1889年）45頁。
- 48) 因伯水産共進会に関する記述は、前掲『私立因伯水産共進会報告』による。
- 49) 『私立因伯水産共進会報告』に掲載された追賞推薦文は、杉村三郎の苗字を「杉山」と間違えており、正誤表を入れて「杉村」と訂正している。しかし、河原田編の『日本水産製品誌』では、この間違いが訂正されることなく、「杉山」のまま掲載されている。このことから、河原田が追賞推薦文を作成したか、もしくは推薦文を引き写して『日本水産製品誌』を執筆したことが明らかである。
- 50) 『水産調査予察報告』第4巻（農商務省農務局、1893年）「第四区因伯但丹海」113頁によると、「かれい及ヒまつばかにノ漁場タル、うみやなぎ（方言ぶち）殖生ノ間ハ少シク深处ヲナセリ、うみやなぎハ海深百二、三十尋線ヲ追フテ繁茂スルカ如シ、故ニ伯州海ハ遠ク三十海里餘ノ沖合ニ出テサレハ之ヲ見サルモ、但馬・丹後ニ至レハ僅ニ二十四、五海里ニシテ之ヲ見ル、而シテ其殖生ノ状ハ二列ニ並行シ、近キヲ灘ぶちト云ヒ、遠キヲ沖ぶちト云フ、距離八海里乃至十海里ニシテ、其間凹処ヲナス（百五、六十尋）、恰モ大陸大河ノ穿通スルカ如シ、うみやなぎハ乃チ其兩岸ニ繁生シ、西ハ隱岐島ヨリ東ハ若狭海ニ連続スト云ヘリ」とある。また、同書には「ぶち帯」として経ヶ岬（現・京都府京丹後市）から越前岬（現・福井県越前町）までの状況（143、144頁、図あり）、越前岬から珠洲岬（石川県珠洲市）までの状況（182頁）が記されている。なお、同書は、水産総合研究センター図書資料デジタルアーカイブ（http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D_archives/A051_S1.html）で公開されている。
- 51) 農商務省技手山本由方は東北日本海側の沖合に「ウミヤナギ」の群生地があり、「将来水産事業の進歩するに至らば必ず東北地方の宝庫と仰ぐべき一大漁場と成るハ必定なり」としている。なお、当該地では「ウミヤナギ」のことを「ガバ」と呼んでいた（服部喜太郎編『社会有益秘宝：日用宝鑑』（求光閣、1898年、「第十八 海柳ハ海底の宝庫なり」による）。また、前掲『水産調査予察報告』第4巻によると、「むしかれいハ冬期うみやなぎ叢生ノ海底泥土ノ処ニ栖息シ、産卵ノ為メ浅処ニ移転ス」（133頁）、「（松葉蟹は）海柳茂生ノ間、泥土ノ海底ニ栖息シ、まかれいと其移動ヲ同フセリ」（137頁）とあり、オオヤナギウエミエラの密集地にムシガレイとズワイガニが生息していたとしている。
- 52) 『鳥取案内』（松陽新報支局、1928年）11頁。
- 53) 前掲『新修鳥取市史』第4巻、経済編Ⅰ、149頁。
- 54) 前掲『新修鳥取市史』第4巻、経済編Ⅰ、110頁。
- 55) 田後村漁業組合『漁業組合概況』（昭和10年）。本書については、羽原又吉「田後の海割制といわゆる漁業共同体」（同『日本漁業経済史』中巻1、岩波書店、1953）14、32頁。
- 56) 『鳥取県史』近代、第3巻、経済（鳥取県、1969年）419、420頁
- 57) 前掲『鳥取県史』近代、第3巻、424-427頁
- 58) 二野瓶徳夫『日本漁業近代史』（平凡社、1999年）213頁。前掲『鳥取県史』近代、第3巻、421頁。
- 59) 『鳥取県の水産』（鳥取県経済部水産課、1956年）33-35頁。
- 60) 鳥取県告示第676号（『鳥取県公報』第12160号、昭和16年8月19日）。